

氏名	宋 武全
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5521 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	芥川龍之介の中国体験 ——その〈中国〉表象から浮かび上がる〈日本〉——
学位論文審査委員	教授 田仲 洋己 教授 山本 秀樹 准教授 西山 康一 教授 遊佐 徹

学位論文内容の要旨

本論文は、芥川龍之介の一連の中国紀行文を、その初出メディアや時代背景を踏まえつつ精細に読み解き、芥川の中国体験の意義と対中意識の解明を目指すものである。

1921 年 3 月下旬から 7 月中旬にかけて、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の特派員として中国東部の都市、上海・南京・九江・漢口・長沙・洛陽・北京・大同・天津等を歴覧した。帰国後、「上海游记」（1921 年 8 月 17 日～9 月 12 日『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に連載）、「江南游记」（1922 年 1 月 1 日～2 月 13 日『大阪毎日新聞』に連載）、「長江」（『女性』1924 年 9 月号、後に「長江游记」として『支那游记』に収載）、「北京日記抄」（『改造』1925 年 6 月号）を次々と発表した。その後、「自序」と「雑信一束」を添えて、『支那游记』（改造社 1925 年 10 月）と題する単行本を上梓した。今回の学位請求論文はその全編を研究対象とする。

『支那游记』を対象として芥川の中国観を探る試みは、早くも 1930 年代にその萌芽が現れ、日中双方の文学者・研究者から批判的な言辭が呈されている。しかしながら、芥川研究の進展、深化に伴い、1990 年代以降、『支那游记』に示された〈中国〉表象を再評価し、そのジャーナリスト的視点を重視する動きが目立ってくる。例えば、単援朝は、「近代史の転換点ともいべき五四運動以来の中国の現状のなかで、最も注目されるべき部分を共産党の代表者李人傑との会見を通して捉え、メモ風の文語体による記事でさりげなく伝えるところに、芥川の「ジャーナリスト的才能」を認めなければならない」（「上海の芥川龍之介——共産党の代表者李人傑との接触——」（『日本の文学』1990 年 12 月）と主張している。また、現在の芥川研究の中核的担い手である関口安義は、「芥川の中国への

まなざしは自己の日本人としての好悪感情をベースにしながらも、それを冷徹に突き放し客観的に事実を事実として伝えるジャーナリストのまなざしとなっている」（『特派員芥川龍之介 中国で何を見たのか』 毎日新聞社 1997年2月）と評している。このような論述は、芥川の中国体験を中国に対する負の感情に拘束されたものとして理解する従来の『支那遊記』評価を一新し、そこに固有の価値を見出そうとするものである。

さらに2000年以降、芥川の〈中国〉表象を再評価する試みが加速するにつれて、『支那遊記』をより前向きに捉える研究成果が次々と発表されている。中国側の代表的研究者である秦剛は、「もう少しで黄禍論に賛成してしまふ所だつた」と述べた芥川の立場について、「紛れもなく「排日」的なもの」と受け止め、「ここでの「黄禍」とは、日本帝国主義が中国に与える禍害を指していて、それは中国的な立場からの、日本の満州進出に対する冷ややかな批判である」という理解を示している。そして「『支那遊記』は自意識の中で「日本人」である自己を客体化するところから始まり、また外部的な視点から現下の「日本」を批判的に捉えることで終わるテキストになっている」（「『支那遊記』—日本へのまなざし」（『国文学 解釈と鑑賞』2007年9月）と結論付けている。また、陳生保と張青平は、『支那遊記』の「高い歴史的価値」を評価するのみならず、「芥川が中国を愛し、特に日本帝国主義の中国侵略に反対していた」（「芥川龍之介『中国遊記』導読」 陳生保・張青平訳『中国遊記』 北京十月文芸 2006年1月、引用箇所は宋武全氏による）とまで主張し、芥川は中国を愛したという見方を打ち出している。

本論文は、『支那遊記』を巡る従来の研究史と評価の揺れの在り方を精査した上で、『支那遊記』に収められた6編のテキスト、すなわち、「上海遊記」「江南遊記」「長江遊記」「北京日記抄」「自序」「雑信一束」を初出時点に立ち戻って慎重に検討、分析し、『支那遊記』の書物としての成立過程を踏まえた上で、芥川の中国観と中国表象の在り方を再検討する作業を試みる。既に記した如く、『支那遊記』に収められた諸編は、当初は『大阪毎日新聞』に連載されたものの、その後は『女性』『改造』といった他誌に掲載されている。このように初出メディアが錯綜する状況下では、各テキストが発表された時点において、どのような編集方針で各紙誌上に位置づけられていたのかということを確認する作業が重要である。

本論文は、『支那遊記』成立に至る経緯を念頭に置きつつ、長期に亘って執筆、発表された6編のテキストを『支那遊記』の束縛から解放し、初出メディアの紙（誌）面に復元した上で、芥川の中国体験と『支那遊記』の全体像を立体的に解析する。併せて、これらのテキストがいずれも1921年の中国体験に即したものであるにもかかわらず、「上海遊記」の発表から『支那遊記』の完成までに4年の歳月が経過している事実に着目し、自らの中国体験に対する芥川自身の捉え方に認識の変化が生じているか否かを検証する。全体は序章及び第一章～第五章から成り、A4版ワープロ打ち1ページ当り約1,440字で計116ページ、四百字詰め原稿用紙に換算して約400枚の分量に相当する。

序章において『支那遊記』の研究史と本論文の着眼点・構成について論述した後、第一章では、芥川の上海滞在記として執筆された「上海遊記」を取り上げる。中国旅行を実現した「私」は、異境である上海を舞台に活動する在中日本人諸氏と触れ合ったことによって、日本人としての自らの在り

方を見つめ直し、アイデンティティを再構築して行くことになるが、本章はテキスト自体に即してその過程を確認することを論の主眼とする。結果として、「上海游記」中に示された芥川の〈中国〉表象は、日本人としての立場を優先し日本の国益を重んずる視点から示されたものであり、「日本」の利益を偏重する『大阪毎日新聞』の政治的立場と呼応するものとして理解されることを論証する。言い換えるならば、「上海游記」は、『大阪毎日新聞』の対〈中国〉言説スタンスに寄り添う形で形成されたテキストとして位置付けることができるのである。

第二章では、芥川の江南体験と「江南游記」を取り上げる。「江南游記」における「私」は、中国で見聞した三様の風景に対して、見下したり、揶揄したり、感傷を漏らしたりするというネガティブな態度を示している。こうした芥川の〈中国〉表象は、啓蒙者的な立場から「古き支那」を批判した上で、「新しき支那」のプラス面を観察してほしいという『大阪毎日新聞』の要請に対する応答として理解することができる。

第三章では、長江遊覧体験を回想して執筆された「長江」を取り上げる。「長江」における「私」の〈中国〉表象は、およそ3年前に執筆された「上海游記」「江南游記」両編に見られる中国に対する痛烈な批判から、好意的なそれへと変化していったことが確認できる。時を経てこうした好意的な〈中国〉表象が導かれた背景には、「情緒の琴線を鳴らしてゐる」「文学」を以て、関東大震災の「記念日が近づく」「不安と焦燥と恐怖との夏」を救おうとする『女性』当該号の編集方針が浮かび上がる。

第四章では、「北京日記抄」を取り上げる。「北京日記抄」においては、中国に対して決して好意的とは言えない負の〈中国〉表象が再度提示されている事実を確認することができる。その上で、掲載誌『改造』の当時の編集方針を実際に掲載された中国関連記事の内容を確認することで検証し、「北京日記抄」における否定的な〈中国〉表象は、「北京日記抄」が発表された当時の中国の社会運動（後に五・三〇事件までに発展する）に対する『改造』の編集スタンスが関係していた可能性がある」と結論付ける。

第五章では、単行本『支那游記』に収録された「上海游記」「江南游記」「長江游記」「北京日記抄」の諸編を再度概観した上で、この時点で新たに添えられた「自序」と「雑信一束」について考察する。そして、「自序」と「雑信一束」の記事からは、第四章で論証した如く、中国の社会運動の興隆によって高まった雑誌読者の中国への関心に応えようとする改造社編集部の方針を窺うことができると結論付ける。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2017年1月30日、学内審査委員4名によって行なわれた。専攻分野による内訳は、日本文学関係教員3名、中国文学・文化史関係教員1名である。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、以下のような結論に達した。

審査委員が評価できるとした主要な点は、以下の如くである。

- (1) 研究の理念と方法が明確であり、論証の手順も概ね妥当である。考察を進めるに当って、まず研究対象である『支那游記』及びそれに収められた諸編の書誌的事実を確認し、必要に応じて初出紙誌の実物または複製を閲覧する等の実証的な手順を踏んでいる。芥川や『支那游記』を対象とする研究文献にも広く目配りし、『支那游記』についての従来の研究史を十分に理解した上で論述を進めている。総じて、実証的な文学研究の手続きと方法論をよく身に付けていると評価される。
- (2) 文学関連の資料にとどまらず、社会史や経済史に関する周辺史料についても積極的な活用を図り、『支那游記』が成立した社会的、時代的背景についても相応の理解を持った上で、論述を進めている。
- (3) 『支那游記』という一冊の書物にまとめられる以前の初出時点における各作品の在り方を、初出紙誌のメディアとしての性格や編集方針と関わらせて論ずるが、万全の論証であるとは言えないものの、メディア研究の成果を踏まえて一定の説得力を獲得している。
- (4) 第一章の「上海游記」論については、作品中に点綴される在中日本人の言動についての記述を詳細に分析し、彼らの間に共通して見られる日本人としてのアイデンティティの在り方を浮き彫りにすることに、一定の成功を収めている。とくに、当時大阪毎日新聞社上海支局長の役職にあつて上海滞在中の芥川の案内役を務めた村田孜郎の言行については、村田の経歴や文化人的側面を確認した上で、その意味するところを綿密に探っている。また、当時の大陸における日本の経済的、文化的進出の実状についても、上海紡績や東亜同文会関係の資料を活用して論述し、在中日本人が果たしていた役割とそれに対する芥川の認識を的確に把握している。
- (5) 第二章の「江南游記」論においては、芥川を中国特派員として派遣した大阪毎日新聞社の意図と芥川に託された「社命」の意味を、同時期に掲載された様々な記事群を分析することで検証する作業に取り組み、一定の成功を収めている。また、「江南游記」の執筆が捗らず苦悶していた当時の芥川の様子を書簡類の活用によって確認し、その背景にある事情を考察するが、「社命」の意義とも関わって有効な問題提起となっている。
- (6) 第三章の「長江」論では、初出誌『女性』1924年9月号の実物に当って、その目次や挿絵、「編輯後記」の意図するところを詳細に分析して、当該号の編集方針が、ほぼ1年前に起きた関東大震災の記憶と深く関わったものであったことを指摘する。そして、当該号において「長江」が小説として扱われていることの意味を分析する。この一連の作業は、実証性の高い研究として評価される。
- (7) 第四章の「北京日記抄」論もまた、その初出誌である『改造』の同時期の関連諸記事を博捜し、当時の日本における大陸への関心の高まりの実状を踏まえた上で、中国の社会運動に対する当時の『改造』編集部スタンスを確認し、同誌が「北京日記抄」を掲載するに至った背景について分析する。歴史的な知見を踏まえての考察は丁寧であり、十分な実証性を獲得していると評価される。
- (8) 第五章では、単行本としての『支那游記』の構成や、単行本上梓の段階で追加された「自序」

と「雑信一束」の意味するところを分析し、第四章に引き続き、同書を刊行した改造社の意図について考察する。その上で、『支那游記』全編を通じての芥川の〈中国〉表象の在り方とその歴史的意義について総括するが、論文全体の考証のプロセスを踏まえて安定した論述となっている。

・ 以上のような評価を得ながらも、その一方で、以下の如き幾つかの問題点や残された課題についての指摘も為されている。

(1) 論文全体を通じて、作家と新聞社・出版社との関わりが大きな論点となっているが、『支那游記』を巡る個別の出版メディアとの関係については資料に基づいて精査、考証されているものの、明治・大正期における出版メディアの在り方について、さらに幅広い理解と知識を持った上で考察を展開してほしかったという憾みが残る。同時代の編集者側の記録も様々に残っているのであって、その一部については本論文中での活用が図られているものの、書簡類も含めてさらに博搜、精査することが望まれる。また、ややトリヴィアルな問題ではあるが、雑誌の巻号と実際の発行日とのずれについても、考証の際には留意が必要である。

(2) 論文内で多用される「表象」というタームの概念規定が曖昧であって、様々な意味合いを持つものを腑分けせずに使用している事例が認められる。

(3) 予備論文段階よりは進展したが、大正期の文人・知識人の中国趣味、ひいては同時代の日本における中国観・対中国認識についての理解がまだ十分であるとは言い難く、『支那游記』を文学史・文化史の中に巨視的に位置付ける考察が不足している。

(4) 第二章第五節において、芥川の中国行の直前の時期に大阪毎日新聞に掲載されたバートランド・ラッセルの文章を取り上げて、その意義と掲載に至った背景を考証しているが、予備論文段階よりは行き届いた内容になってはいるものの、万全な論述になっているとは言い難い。この件は、大阪毎日新聞社側の中国特派員派遣の意図と深く関わる重要な問題であり、本論文の中では言及されていないが、有益な先行研究も存在する。未解明の関連資料が存在することも予想されるので、更なる調査と検討が望まれるところである。

(5) 『支那游記』中に登場する日中両国の文人の事績や詩作について、論文中に示された情報に不足する部分があり、論述の有効性を判断するのに留保が残る場合がある。例えば、第二章第六節の末尾において、今関天彭なる文人の詩が「江南游記」に引用されていることの意義が論じられているが、この人物についての具体的な情報が本論文中には全く示されていない。今関天彭の事績については参照すべき文献が存在しており、それを踏まえた上での考察でなければ、芥川が今関氏の詩を引用したことの意義を十分に解明することはできない。

(6) 第一章第二節等に見られる『支那游記』中の風景描写記事を分析し芥川の対中国意識を考察する論述において、やや単純な二項対立的説明に終始する箇所がある。論文全体を通じての印象であるが、論旨・主張が鮮明に打ち出されている反面、芥川の記事の微妙なニュアンスを十分に汲み取れていないところもあり、日本語の読解能力の更なる向上が望まれるところである。

(7) 『支那游記』の先行研究の情報についてはほぼ完全に把握していると評価されるが、研究史の理解に際しては、研究する側の時代的な制約、バイアスといったものの存在にも留意して考察する視点が必要である。

しかしながら、近年日中双方の研究者から注目されること多く、研究論文も多数産み出されている『支那游記』の位置付けについて、ややステレオタイプ化した従来の議論からいったん離れ、「上海游記」以下各編の初出段階に遡ってその執筆・掲載の意義を再検証しようとする本論文の狙いは、研究史的にも高く評価されるものである。『支那游記』成立時の歴史的・社会的な背景にも目配りしつつ、初出紙誌とその周辺の一次資料を丹念に確認して掲載メディアの意図を考証するという粘り強い作業の積み重ねは、近代文学を対象とする実証的研究として十分な意義を有している。日本語の文章として未整理な箇所も少なく、論文全体のまとまりも良好である。審査委員会は、以上のような諸点を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。